

# ふるさと風

第69号 (2012年2月)

風に吹かれて (48)

白井啓治

『四十年來の戦友に再びの力の頼む』

未だ原稿用紙に物語を殴り書いていたころ、最も力を貸してくれ頼りになったのが、万年筆であった。

今年は今「風の会」や兄妹の「ことば座」にどうして何だかチャンス到来の予感を感じている。小生も少し気を引き締め、初心に、と言うか青年期に戻って積極的な表現活動を行おうと、新年早々まずは小生の城である机とその周りの整理・模様替えを始めたのであった。

机の引き出しを開けると、奥の方に魔除けの彫刻が施された黒檀の小物入れがこちらを見上げるようにしてあった。この小物入れは、弟子が東南アジアに出かけたときのお土産としてもらったものであるが、万年筆を入れておくのにちょうどいいサイズなので、万年筆入れにしてある。最近では万年筆を使うこともなく小物入れの蓋を開け手に触ることもなかった。

小物入れには7〜8本の万年筆が入っているのがあるが、実際に多くの戦場で一緒に戦ったのはブルドック型のモンブランの万年筆大と中の二本である。特に大型の万年筆は思い入れの深いもの

である。長男が生まれた翌年、昭和48年に購入したものであるが、長男が生まれた47年オイルショックだったかドルショックだったかで、順調に流れ始めていた仕事が全部ボシヤリ、出産費用をどう捻出しようか頭を抱えた年であった。

年が明けて48年は、年明け早々に一仕事が決まりホッとしながら、これからは筆一本で女房子供を養っていつてやる、という私自身の決意表明のつもりで崖から飛び降りる気分で購入したものであった。当時のお金で三万数千円払ったと思う。十分程度の短編映画一本の台本料に近い値段であった。

しかし、この万年筆は実に頼りになる相棒、戦友であった。年間三千枚を超す原稿を書きながら、書き換えたのもこの万年筆であった。ペン先は三度ほど交換した。交換の度ポンプ等のオーバーホールをしてもらった。子どもが悪戯をして小さなひび割れを作ったが、使用には影響ない。

手に握ると実にしっくりと馴染んでくる。まさしく自分の分身である。原稿は腕力で書く、とは作家たちの共通した言である。原稿用紙のマス目に向かって書きなぐる様は「文章を紡ぐ」などの軟な表現とは無縁の、実に腕力以外の何物でもない格闘技である。それでないと月に三百枚、四百枚の原稿は書けない。だから筆具を何にするかは

作家の重大な選択事であった。

今では万年筆で文章を書く人は殆んど居ないといつてよいだろう。私自身もそうである。パソコンで執筆するようになって16〜17年になる。ペンだこの心配はなくなり、原稿の修正も実に楽になった。特に年齢を感じる昨今では、実にありがたい筆記用具である。

## ふるさと風の文庫新刊案内

◎ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の作品が全集となります。今回は第1〜6巻が発売されます。(各巻1200円)  
(歴史の里石岡とは言われながら、多くの歴史文化がわすれられていく中に伝え残していかなければならない歴史文化を独自の打田史学としての視点で見つめなおした作品集)

◎兼平ちえこのふるさと散歩「歴史の里いしおかめぐり」(1200円)  
(ふるさと石岡の絵散歩文庫。東日本大震災の被害に合う前の、貴重な石岡史跡の絵が満載です)

※ギター文化館および街角情報センターにて発売しております。

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

当風の会も兄妹のことば座も「自力たれ」をモットーに牛歩ではあるが着実に五年間を歩いてきた。六月が来ると七年目に入るが、自力たれの成果が少しづつ現れてきた。特に「ことば座」は、昨年美浦村の陸平をヨイショする会に招かれて縄文の森コンサートで演じる機会を得たことで、モダンバレリーナの柏木久美子さんとの交流が生まれ、それが好転し、今年の八月には柏木久美子さんと一緒に、香港マカオでの朗読舞公演が実現することとなった。

これからは小林幸枝の手話舞もマニアックな段階から脱しメジャーに通用するものにしていかなくてはならない。それにはこのふる里をモチーフにしながらもドラマとしての発展は一層のスケールを持つて書いていくことが要求されてくる。そんな時に、引き出しの奥から「俺を必要とする時期がもう一度来ただろう」と戦友の万年筆から声を掛けられたのは、単なる偶然ではないだろうと思いたい。

ぬるま湯で一度ポンピングしてから、何年かぶりに万年筆にインクを吸わせる。そして「もう一度二人でひと暴れるか」と創作メモの手帳に書き込んでみた。

舞踏家柏木久美子さんとの出会いによって、今、新たな創作意欲が刺激され、手話舞を基軸とした朗読舞劇をさらに進化・発展させた朗読舞踏劇を創り上げてみたいと思っている。

小林幸枝には、百の恋物語と七十歳までの元気を約束したのであったが、百の物語にはまだ先は遠い。しかし、七十歳は目の前に来てしまった。

だが、今年は愉快の予感がする。

## 災害を教訓に！

菅原茂美

日本が、戦後速やかな復興を遂げたのは、自然災害が多い列島ゆえ、国民はその対処法を、十分心得ていたから：とも言われる。

確かに日本列島は、地震・津波・火山噴火・台風・冷夏による凶作など、どれだけ自然災害に痛めつけられてきたことか：。しかし日本人は、たゆまぬ努力で、どんな困難をも乗り越え、今日の国家を築き上げてきた。

振り返ってみると列島で最大の自然災害は、火山噴火といえる。三宅島では過去50年間に13回も大噴火があり、2000年の噴火では二酸化硫黄ガス噴出と降灰で、4年半も全島民が避難した。

富士山（1707年、浅間山（1783年）の直近大噴火では、降灰はすさまじく、関東ローム層は最大10mを超す所もあり、当時の農民は降り積もる火山灰に、いかほど苦しめられたことか：。有毒ガスや酸性雨を伴う火山灰ほど、全生物に、ダメージを与えるものはない。

事実、カンブリア紀以降の5億年間に、全生物種の90%が絶滅した事件が、5回も起きている。煤煙が成層圏にまで達し、何年間も地上に太陽光が十分に届かない。植物が繁茂しなければ、空気中の酸素濃度も低下し、酸欠状態となる。そして6500万年前には、直径10kmの小惑星が、中米ユカタン半島に衝突し、全盛を誇っていた恐竜を滅亡させた。他人の不幸のお陰で：という大変だが、空いた隙間で哺乳類が繁栄することになる。またそのお陰で現在の人類がある。生物の進化は、自然災害との競争である。長いスパンでものを考えると、人類も今日の繁栄に至る遙かなる旅路で、

火山噴火や気候変動により、幾度、絶滅の試練を乗り越えてきたことか：。

話は変わり利根川は、元々江戸川を通じ東京湾に注いでいた。江戸が繰り返し洪水に襲われるため、江戸幕府は、治水のため215年もかけて流路を変え、利根川の水を鬼怒川に合流させ、銚子港に流したという。2011年タイ国のチャオプラー川川の氾濫による大洪水（600万人、被害総額4000億円、230万人が被害）を見れば、昔の江戸の洪水の状況が想像できる。このように、列島は巨大地震・巨大津波・火山噴火・洪水などにより、数えきれないほど痛めつけられてきた。そして度重なる凶作により、娘を身売りした悲劇など、農村に永く語り継がれている。

しかし、日本人の復興への根性は見上げたものだ。これら巨大災害を、悉くクリアし、今日の繁栄を築き上げてきた。財政難に苦しむ小藩や、後の自治体など、叡智を絞り、血みどろの戦いで、それらを克服したに違いない。日本人の驚異的な回復力に尊敬の念を抱かざるを得ない。

そして自然災害だけではなく、街の大火など、人間の犯したミスにより、巨大事故も多数発生している。更には、意図した悪意による巨大事件も勃発している。その最たるものは、「大東亜戦争」であろう。国民の命は虫けらのごとく扱い、戦地に露と消えていった将兵。そして残された家族の悲惨さ。戦後66年もたっているのに、その傷跡は、いまだに生々しく残っている。

そして日本軍により、国土を踏み荒らされた近隣諸国。その恨みを考えれば、今、日本は経済大国などと大きい顔して、世界をのし歩ける立場ではなからう。先日、韓国の李明博大統領訪日の際、

従軍慰安婦の補償問題について、強烈な訴えに、日本政府の「解決済み」との回答には、腹が煮えくりかえる思いであつたらう。遺恨は百年や3代などで、消え去るものではない。

私など、執念深いかもしれないが、823年前、極楽浄土を夢見た、わが郷里の奥州平泉が、猜疑心の強い頼朝により捻りつぶされ、藤原3代95年の歴史に終止符を打たれた事を、今でも遺恨に思っている。

\* \* \* \* \*

さて、日本の回復力に目を向けよう。戦時中、日本は、天皇を神格化し、軍事一色だった国政を、占領国の指図とは言え、一気に平和憲法のもとに立て直した。即ち、軍隊を廃し、財閥を解体し、農地を解放して、民主主義を取り入れ、驚異的なスピードで平和の礎を築きあげた。他力本願とはいえ、災難に対し、国民は一致団結、事に当たろうとする「素地」がなかったら、あのような速やかな国際復帰はあり得なかつたであらう。

平和ボケしている現代の日本人には、「言論の自由」など当然のことと映るかもしれないが、戦前の言論統制など、想像を絶する厳しさであつた。私は、まだ幼少だったので具体的には知らないが、「自由」とか「平等」などを口にして、憲兵隊にしょつ引かれた話は、何度も聞かされた。いまだに世界のあちこちで、政治犯とか反体制派とか言つて、平和主義者が拘束され、拷問による獄死や、受賞決定があつても、ノーベル平和賞を受け取れない人もいる。

すぐ隣の北朝鮮では、百万人の餓死者に、三万人の政治犯が殺害されたという報道もある。軍事優先・強勢大国建設！ 後継者はそのまま前体制

を引き継ぐことになりそうだ。その蔭では、偽札・偽タバコ・麻薬・それどころか500トものサリンなど有毒ガス、及び取扱者のための毒ガス防衛服など、輸出の現場を押さえられたと報道されている。そして、ミサイルなど大量破壊兵器を輸出して外貨を稼ぎ、国民を飢えさせては首領のみブクブク太る。韓国・日本などと共に、「儒教道徳」を学習した国民なのに、なんたる体たらくか。

一方、2011年の「アラブの春」といわれた中東やアフリカ北部に吹き荒れた嵐は、真の自由と平等を求める国民の総決起であつた。それゆえ、中国などでは、インターネットで連動する国民運動を、極端に恐れる傾向がある。その他この国も独裁政権は、自国に民衆運動が勃発しないよう、いかほど神経をとがらしていることや。

世界には、いまだに独裁による国民の拘束が、通常に行われ、国民は自由に物も言えず密告など疑心暗鬼で、自由平等の平和国家など、「夢のまた夢」状態の国は多数ある。そういう国から見たら、戦後日本の平和的な復興は、正に驚異であらう。

日本人がいかに勤勉であり、公德心厚く、礼儀正しいとはいへ、「衣食住」悉く喪失し、焦土と化した戦後、略奪など無政府状態に陥らず、整然と復興できたのは、世界から高く評価されている。

戦後わずか19年で、オリンピックを開催し、新幹線を走らせ、自動車産業の隆盛、道路・港湾・空港などインフラ整備。そして国民の教育を充実させ、復興の原動力としたその勤勉さは、今の世代は、しっかり見習わなければならない。水上では華麗に見える水鳥も、水中では必死の足掻きに支えられている。シンクロナイズも水上の笑顔の演者の下には、水中で支える人がおればこそ…。

【そこで忘れてならないのは、敗戦のドン底にありながら、1949年湯川秀樹博士のノーベル物理学賞の受賞が、どれほど国民を元気づけたことか。古橋選手のフジヤマの飛魚が世界を制し、東洋の魔女がバレーボールで、遙かに背の高い世界の強豪を制した。(今回も「なでしこジャパン」が世界を制覇した栄誉は、不況や震災であえぐ日本国民を、いかほど元気づけたことやら…)。これらの快挙は、大げさにいえば、戦後日本復興の大きな原動力になったとも言えるだろう。】

\* \* \* \* \*

さて、2011年は、日本列島にとって、最悪の年であつた。勿論、災難が重複する年は、過去にも何度もあつたはずだが、近年では、これほどの複合災害の年はなかつたような気がする。

東日本をマグニチュード(M)9の巨大地震が襲つた。世界の歴史上4番目に大きい地震である。全世界でもM9クラスの地震は百年に2〜3回と言われる。東日本では869年の貞観(じょうがん)地震(推定M8.4)以来の巨大地震である。

それが今回、地震だけなら、かなり免震建築も進んでいるので、今日の日本では、そんなにダメージを受けることはなかつたであらう。事実、震度5くらいなら、毎度のこと、かなり慣れっこになっている。しかし、震度6ともなれば、結構、構造物は痛み、交通網の破壊、液化化現象、ライプラインの損壊などかなり深刻である。ところが、更に震度7と来ては、これは地震慣れしている日本列島でも、かなりのダメージを受ける。正に生命線を絶たれるようなもので、行政は仮設住宅の確保などに莫大なエネルギーを費やす。しかし、その範囲は、かなり限定(今回は宮城県栗原市のみ)さ

れた地域であり、列島悉く麻痺状態というほどのことではない。

ところが、今回の巨大地震は、海溝型で超巨大津波を伴っていた。その規模は近年では最大のものである。東日本が乗っている北米プレートの下に、太平洋プレートが潜り込み、その蓄積した固着面の「歪み」が一気に解放されたために、陸側プレートの海底が5メートルも跳ね上がり、そのため、巨大津波が発生した。その津波が、人命など何もかも奪い去り、住宅・職場・港湾・交通網など寸断し、壊滅状態となった。

今回の津波の高さは宮古市姉吉地区で40.5メートルまでせり上がった。そして大津波は北上川を49キロも遡上したという。宮古市田老地区では1933年の昭和三陸津波を受け、44年もかけて作った防潮堤（総延長2433メートル・高さ10メートル・万里の長城とも言われた）を、更に4メートルも乗り越えた。

今回の東日本大震災では、死者・行方不明者、合わせて、ほぼ二万人。海溝型の地震では、巨大津波により、多くの人命が失われる。

それゆえ、今後は、最も歪みが蓄積している北海道十勝沖を始め、かなり高い確率で発生しうるとされる東海・東南海・南海の巨大地震、及び巨大津波について、緊急に対策が検討されている。しかもこれらが連動すれば、波高は倍増し、計り知れない被害が予想されるという。1995年の阪神淡路大震災のように、大都市が直下型地震に襲われたなら、それは想像を絶する被害となる。特に私が心配なのは、地下鉄や地下街が地震の揺れでヒビ割れを起こし、そこを津波に襲われたら、忽ち、街ごと湖底に沈むようなもの。東京などの都市計画は、この辺をどう考えているのであろう

か。ポンプで自動的に水を汲み出すというが、福島第一原発のように、全ての電源が同時に喪失する事は、絶対ないとは言えないだろうに。

しかし国民は冷静に復興を目指す。それは過日新聞報道で私が驚かされた事だが、沿岸県でもない埼玉県が津波対策を本気で検討しているという。それは、東京湾の荒川河口から30キロほど上流に、埼玉県の主要都市が存在するからだという。事実、北上川では、今回津波が49キロも遡ったと聞けば、埼玉県も放置できない問題として真剣に取り上げたのであろう。震災が風化しないうちに、教訓として生かす努力は、高く評価したい。

\* \* \* \* \*

そして複合災害も、地震と津波だけだったら、国の屋台骨を揺るがす大事件とは言えなかっただろうが、不測の巨大津波が引き金とはいえ、東京電力福島第一原子力発電所の事故である。世界で3回目の巨大原発事故。放射能が広範囲に飛散し、住民は急遽避難。勤めや学校などの問題もあり、家族は離散。家畜など半殺しの状態。農地は放射能汚染で、作付け不能。生産物は風評被害で販売不能。危険だから逃げると言っても、風向による避難の方角など、政府も東電も、きめ細かな指示は全く無し。政府は放射性物質の拡散を予測するためのSPEDIのデータを3月23日まで公表もせず、避難民は羅針盤を失った船同様。危機管理のできない官邸。正に「人災」である。

福島第一原発の安全性について議論する席で、地震学者など、過去の事例からも、巨大津波の発生について再度その防御対策を進言したにもかかわらず、東電の経営者や、政府の安全保障院など、聞く耳を持たず、安全神話は捏造された。15日ク

ラスの津波襲撃を進言しても、最大5.7しか対応しなかった。人命よりも企業利益優先。国民を餓死させても軍事優先の国となら変わらない。

事故発生時、東電本社や首相官邸など正に烏合の衆で、不適切な指示を連発。事の重大性を把握できず、余計な口出しをする。現場の事は現場の所長が一番よく知っている。原発を冷やさなければ、メルトダウン（炉心溶融）や水素爆発で放射能は拡散する。通常使っていたダムからの真水は地震で破損し供給不能。やむなく海水注入で冷却しようとするれば、欲の深い経営者は、原発の再稼働を考え、海水の注入は何とかして避けたい。そこで本社から、海水注入中止の命令を受けた現場の所長は、芝居をうって『海水注入中止！』と大きい声で号令をかけ、小さな声で海水注入継続を指示したという。所長の芝居が無かったら、被害はもっと甚大なものとなったに違いないと言われる。その所長は今、「がん」で入院しているという。悪い奴ほどよく眠り、正直な者は病に苦しむ：…なんたる理不尽。とにかくキョウカンチョウ（鳩山と菅元総理）は、軽口はたたくが、あまりにも、「真心」はこもっていない。

\* \* \* \* \*

さて、地震・津波・原発事故に対する、国の対応であるが、あまりにも無神経。体面を保つために補正予算など緊急措置を取ったかに見えるが、国の交付金は、非常に使い勝手が悪いという。事業が完了すれば、3分の2とか5分の4とか復興費を交付するというが、巨大インフラ整備など、完成には数年は当然かかる。それが完成した後でなければ現場に現金は降りてこないというのでは、話にならない。これでは急いで復旧工事などでき

るわけがない。国民がどんなに苦しもうが、臨機応変の対応など何もしない。口先で「国民の生活が第一」など、まるで寝言にしか聞こえない。ここに役人や政治家の、薄情な応用の利かない無能ぶりが顕著に表れている。しかも災害復旧費の緊急交付なのに、各県庁は、交付先に恩を売ろうとして、交付金に「ひも」をつけようとしているのだという。ここにも「省益優先」の原理が見え隠れ。即ち、公共事業↓ゼネコン↓天下り先：の方程式がチャンと生きている。そして官僚と手を組み、うまい汁を吸おうと、ウロチョロ気配を嗅ぎまわるハイエナみたいな政治家など、何が何でも次は当選させてはならない。

\* \* \* \* \*

さてこれだけ高い授業料を払った震災・人災である。この経験を十分に生かして、今後確実に発生するであろう北海道や西日本の大規模地震・津波に備えなければならない。特に原発事故の回避策については世界中、注目の的である。先進国は原発推進・廃止両論あるが、発展途上国は、発電コストの安い原発導入に強い意欲を示している。日本は今回の苦い経験を十分に生かして、国内原発の絶対安全策を確保すべきである。そして、海外に輸出した原発についてもアフターサービスをしっかりと果たし、信用を確立することだ。災い転じて福となさねば、落命された多くの方々に、申し開きができない。

さー復興だ。いつまでも失業保険や義援金に頼ってはられない。国は雇用促進のために、企業誘致など強力に推進すべきだ。被災地にはまずもって雇用の確保。この一語に尽きる。通り一遍の復興補助金ではなく、その土地に永遠に根付く産

業を導入することだ。そうすれば二重ローンを抱えていても、避難民は故郷に帰ってくる。仕事があれば故郷は活気を帯びる。それが政府の活きた復興対策だ。都会に集中している企業の一部は、直ちに被災地へ移転すべきだ。私に「衆愚院」と悪口をたたかれたくないなら、選挙も近い。衆議院議員は、死に物狂いで「真」を示せ！想定外とは、思慮が足りないことであり、免罪符とはならない。経済の動きも自然界も、人知の及ばぬ突発事項はよく起きる。あらゆることを想定し、事に当たらなければ進歩はない。今回の複合災害は、今後、全世界の安全のために、教訓として、しっかりと活かさなければならぬ。

## 茨城の縄文語地名 2 鈴木 健

### 平潟・平磯

ヒラカタ＝崖際／ヒライソ＝崖岩

**語源** 【pira 崖】【ka 上、岸、ほとり】【ta そこのところ】／【pira 崖】【iso 水中の波かぶり岩】

**所在** 「私はそれから常陸の平潟の港へ身を避けた。平坦な土地のみを見て居た私にはすべてが目を惹(ヒ)いた。海岸は皆一帯の丘阜(オカ)である。其(ソノ)丘阜を丸鑿(マルノミ)で創(キ)り

とったやうな小さな入江が穿(ウガ)たれている。宿の店先から左へと行って行くと後の丘の続きが崖を造って立ち塞(ラサ)がっている。そこに洞門があつて街道が通じてある。」長塚節の短編小説『隣室の客』の一節だ。津波で大被害を受けた

平潟漁港を抱く北茨城市平潟は、漢字通りに解釈すると、波静かな遠浅の海あるいは入り江ということであるが、実体はこのとおり。丘が海岸まで迫る崖地、pirakata そのもの。『古事記』『日本書紀』でも比良坂・平坂は崖坂。中国・四国を除く青森から沖縄までヒラは坂や崖、沖縄の陰見坂(ホーミビエ)の語源もその名のとおり。滋賀県の比良(ヒラ)山の琵琶湖側は急な断崖である。ひたちなか市の那珂湊地区にある平磯町は pira-tao の町だ。

西表島のほぼ中央に「カンピレー／カンピラの滝」と常にカタカナ書きの滝がある。「神々が坐するところ」の意といわれ、島の創生に関わった聖地という伝説がある。が、それ以前に、【kan 上にある＝ka 上/an にある】【pira 崖】というアイヌ語解どおりの「上にある崖からの滝」という即物的な命名があつたと思われる。石垣島には有名な川平(カヒラ)湾があり、日立市の御岩山は、『常陸国風土記久慈郡』に「石を以ちて垣と為す」【賀毘礼(カピレ)の高峰】とある。このも、【ka 上】【pira 崖】＝上が崖になっている。近くの神峰(カミネ)山は地名の上でもこのカピレに続いている。山中にある高萩市下君田の川平もおそらくカピラ地形であろう。そのほか、各地の平山、平沢、平川などの平は崖であることが多いのではなからうか。また、平をタイラと読ませる場合もある。

### 久慈法

クヂハマ＝崖浜・クジハマリ向う渚

**語源** 久慈郡を流れ降る久慈川。その河口にある日立市の久慈浜。これらのクジはなにか。「古老ラ

ルオキナ)のいへらく郡(コホリ・郡役所より南、近く小きき丘(ヲカ)あり。体(カタチ、鯨鯢(クヂ)に似たり。倭武(ヤマトタケル)の天皇(スメラミコト)、因(ヨリて久慈(クジ)と名づけたまひき。『常陸国風土記久慈郡』。チとジを区別しないこの地だからクヂ→クジは仕方がないが、語源がわからなくなると、このような語呂合わせが横行する。それにしても、久慈の語源はややこしい。まず、

クヂを取り上げると、アイヌ語(縄文語)に【kut断崖、絶壁】、語尾の追加母音化(前号1頁注)でkui→クチ→クヂ。断崖の久慈川・久慈浜ゆえのクヂ。浜は【ha潮が引く】[makうしろ]、語尾消去母音化(同注、hamak=波打ち際のうしろ一帯ということであろうか。久慈浜の老人たちも、クチハマ、クツチャマと呼んでいる。

クジであるならば、【kusi川(或は山)の向う】と【kus通る、通行する、通過する】が関係する。久慈川の河口にある久慈浜には、川流・潮流・風波の作用で長大な砂洲が形成され、久慈川は海岸に並行に砂洲との間を流れていた。砂洲は「向うなびや」と呼ばれ、文字通りの【kusi川の向う】で、【kus通る、通行する】[iとろ、こと]⇨舟で越すところであった。そこが久慈浜、そこに向かって流れるのが久慈川ということになる。同じく沖縄には、フィシンクシ(前方礁原の向う)があるし、u→o、kusi→kosi⇨川越、山越しの越(=の向う)とかな。

転音 kut→kuti→kudi / kusi→kuji / hamak→hamak

**磯崎・磯浜・伊師浜・磯原**

イソザキ⇨磯前 /

イソハマ⇨磯浜 / イシハマ⇨石浜 / イソハラ⇨磯と砂原

**語源** 前記のように、ひたちなか市の那珂湊地区にある平磯町は【pira崖】と【iso水中の波かぶり岩】であった。北隣に磯崎町、那珂川を挟んだ大洗町に磯浜町がある。磯崎町には酒列磯前(イソザキ)神社がある。大洗の方は、まえに紹介した『巨人の磯』に「大洗磯前(イソザキ)神社の大鳥居

前を過ぎ町を抜けると磯の匂いが強くなり、すぐに海辺になる。大小の岩礁が手前の海面にひろがっていて、波に囲まれた岩礁の上に小さな鳥居が立っていた。海は風(ナギ)だが、岩のまわりには白い波が立っていた。」(松本清張)とある。これら

磯は、「磯で名所は大洗さまよ」の磯⇨波が来れば隠れ、退けば現われる【iso水中の波かぶり岩】である。崎は【sa(山に対して)浜、(奥、後に対して)前、側】[ke所]⇨前のところ。浜は前記の【ha潮が引く】[makうしろ]⇨語尾消去母音化、hamak。磯原の磯は天妃山、その左右の浜辺が【para広い】砂原か。イソ(磯)はイシ(石)を派生し、大洗の磯浜に対して、日立市に伊師浜。イシの小・子・粉(ヨ)がイサゴ⇨砂で、日立市に砂イサゴ沢町、古河市砂(イサゴ)井新田。

転音 isosake→isozaki / isohamak→isohamak / isihama / isopara→isohara

**オソネ磯** ⇨大磯

**語源** 日立市久慈町の沖合いに「オソネ磯」があ

る。そこは大磯・神磯・おんねさまなどと呼ばれ、神聖視されていたが、昭和の戦争中、射撃演習の標的にされて、砲弾を打ち込まれたという。そのオソネはアイヌ語(縄文語)で【onne老いている、大きくある、親である】、すなわち、地元でオソネ磯⇨大磯で通用していたとおりである。『今昔物語集』(二二〇年ころ)には、「人ノ祖(おぢ)ノ年痛(いた)ウ老(おい)タルハ、必ス鬼ニ成テ此(か)ノ子ヲモ食(く)ム」ハムト為(す)ル也(なり)ケリ」とある。鬼⇨親⇨老であり、縄文語の onne→onni、鬼、それはまた、ony(例イナイヤ、ミナハルミヤハル)の転音で、oyya 親・oyyi 老となった。鬼(omni)婆の原義は老(ome)婆であり、鬼(omni)沢は大(onne)沢のことであった。

転音 onne→onni / onna / onne→oyya→oyyi

**所在** 筑波と佐渡の女体山が男体山より高い(大きい)のは onne【大きい、親の、老いた】⇨オンナ(オンナとは別。老女だから。筑波の麓ではオイカワのメスをオナヤマベと言った。そのオナはオンナ(雌)であるとともに、大型のことであった。沖縄本島の恩納(オンナ)岳も島南では一番高い。牛久市から龍ヶ崎市に広がる女化(オナバケ)原は伝説が生まれるには絶好の地名であるが、長く続く比較的高い崖の上に立地していることからすれば、【onne大きな】[pake崖]と種明かしができそうである。同じくオナハマ(小名浜)も【onne】[ha]【mak→mak】大きな浜であろう。オンチ様、オン大将などのオンもこの onne の名残とみてもよい。北茨城市華川町上小津田に大荷(オオシ)沢という小字がある。鬼沢と同じ【onne 大きい、親の、老いた】沢で、近くにある沢のなかで一番大きい

沢の意。花園川とみなされる。沢も【so 水中のかくれ岩、滝、床、表面一帯】に遡るものと思われる。

### ウタレ・ウタレパタ

＝波打ち際

**語源** 長塚節の『隣室の客』は続く。「短い洞門をくぐれば直ぐに磐城の国である。一ぱしやりと碎ける波の白い泡が幾らか勾配をなしている砂浜の上をさらさらと軽く走りのぼる。土地の人は此处を「ウタレ」といつて居る。」土地の人たちが「幾らか勾配をなしている砂浜」をウタレと言うからには、縄文語の【ota 砂浜、砂】【ri 高くある】i:【たいる】が引き継がれ、この地の典型的な転音o→u、i→eでウタレとなったものである。隣の茨城の海岸でも、波打ち際をウタレとかウタレツパタと言っている。そのパタは【pa 頭、崎、上手、ふち】【ta そこのところ】。ふち、際のところということである。

**転音** ota→uta / otari→utare / otaripata→utareppada / ota→woda / otaka→wodaka

**所在** 「ウタレ」同様、オタがウタとなった地名には、日光中善寺湖の砂浜に歌ガ浜、行方市行方に歌ガ崎、サキは【sa 側】【ke の所】。大子町上野宮の有多ヶ沢かどうか。余談だが、はかなく消えやすいもののたとえに水の泡の意味の「うたかた」がある。それは【ota 砂浜】【ka 上】【ta といる】のo→u、ウタカタで波の駆け上がりでできた砂上の水泡ということ以外には語源が見当たらないのではなからうか。

北茨城市の平地部は現在田畑や住宅地が造成されているが、縄文海退後に砂地や湿地になったところなので、そのような地形は地名にも反映し

ている。磯原町上相田（ソウダ）は市の中央に位置し、田畑が広がる。塩釜神社があることは、かつてそこは海岸で、製塩がおこなわれたことを示す。【so 滝、床、表面一帯】【ota 砂、砂浜】＝一帯が砂地のo→uソウタであろう。磯原町豊田（トヨダ）も市の中央部で、三方が川に囲まれ、田畑広がっている。【toy 土、畑、原】【ota 砂、砂浜】＝砂原ではなからうか。

### 小田・小高

＝砂浜

**語源** ota をo→wo の転音で地名にとりこんだのが、【ota 砂浜】→つくば市小田（ヲダ）、【ota 砂浜】【ka 上、岸、ほとり】→北茨城市関南町関本下・行方市・土浦市小高（ヲタカ、いずれも縄文海退時には砂地であったと思われるところである。行方市小高は「古（イニシ）、佐伯（サヘキ）縄文系在住民、小高（ヲタカ）」というものありき、其の居（ス）める処なれば、因りて（※男高と名づく。「常陸国風土記行方郡」とあるが、小高に住んでいたからではなく、男高に住んでいたからの命名であろう。神奈川の小田原の原語は【ota 砂浜】【para ひろく】であろうし、宮城県の気仙沼湾の田んぼのない大島にきれいな小田ガ浜、福岡県の糸島半島にも小田浜がある。

**転音** ota→woda/otaka→wodaka/otapara →wodawara

### 油繩子・稲子

ユナゴ・イナゴ＝砂子、砂地

**語源** 油繩子はユナゴと読む。そのユナに対応するアイヌ語（縄文語）に【una 灰、火山灰】、u→yu の転音は、移ル→ユツル（万葉など多数で、una→

yuna→yona。ユナ（岩手・茨城沖繩八重山 砂）、ユナゴ（油繩子＝砂子）、ヨナ（九州火山灰）、ユニ（沖繩宮古州）、ヨネ（沖繩砂）、イノー（沖繩八重山 砂）、ヨナゴ（米子市）。米・稲は砂のように小粒だから、ヨネ（『和名抄』米）、イネ（同稲）か。穀類の用語はすべて外来語であるという先入観が強い。しかし、渡来系支配層によって稲作労働を強制された縄文系在住民は外来語を理解できないので、自分で表現したのではなからうか。コメも然り。

**転音** una→yuna→yona→yone→ine

**所在** 北茨城市市関本町才丸に湯十子田（ユナゴダ。※十はナノ誤植か）、隣の高萩市中戸川に油繩子、上手綱に油繩子沢、日立市油繩子、常陸大宮市諸沢に油繩子田、大子町冥賀に蝗（イナゴ）沢・湯名古平、上野宮に湯那沢・湯名（砂金か）沢、高柴に湯奈田。イナゴ（千葉茨城 砂）、銚田市旧大洋村・鹿島市旧大野村に砂子・稲子・稲後・稲古等イナゴの当て字地名多数。前記高萩市中戸川の油繩子は砂鉄であったか、多々良（タタラ）場川が流れている。花崗岩は風化すると砂鉄を分離する。稲田御影（花崗岩の産地、笠間市稲田も砂鉄どころのことである。ただし、命名の時代はさがることになる。

### 阿字ヶ浦

アジガウラ＝魚の浜

**語源** アイヌ語（縄文語）に【a われの、われわれの】がある。『万葉集』等に見える「あ」とほぼ同じ意味である。また、【chep ⑦食物、④魚、⑤鮭＝chi われわれが⑤食（p）物】を先に見た。その【a】【chep】の子音尾尾音化 achep→アヂ（和歌山有田 魚。旧カナがアジでなくアヂである根拠が ch。縄文

時代、有田地方で「われらの食物」といえば魚であったろう。)  
 鮭(『和名抄』阿遅(アヂ)はどこでも手軽に獲れたので、魚(アヂ)といえは鮭(アヂ)ということになったか。アキアジ(奥羽・北海道 秋に川へ上がった鮭。茨城・新潟 塩鮭)は「秋味」と書かれるが、不自然。秋に獲れる【aわれわれの】【chep の食物、①魚、②鮭】chiわれわれが/e食う/y物】である。アイヌ語で鮭を【chukipe || chuk 秋ipe 魚】とも言うとおりに秋魚(アキアジ)と書く方が正しい。「いい味(アジ)だ」の元を糺せば「いい魚(アジ)だ」だったかもしれない。どちらも旧カナではアジではなくアヂだから。津波で大被害を受けた宮城県牡鹿半島南沖の網地(アヂ)島は黒潮の行き止まりらしく、魚(アヂ)の宝庫になっている。

ひたちなか市の阿字ヶ浦も、ここではヂ、ジの区別がなかったから、アヂ(魚)ガ浦であったろう。その浦には二つの語源が考えられる。一つは非常に多いd-rの転音(例イクターイクラで、ota(砂浜)→uda→ura。青森県の仏ヶ浦は仏ヶ宇多の転音という。ほかに【oro内、中、所】(すなわち、内海、入り江、港)の母音交代形のura。縄文海進時そこは入海だったかもしれない。

**転音** achep→achep→aiti→adi→aji／ota→uda  
 →ura／oro→ura

**仁田仁井田** ニタ↓ニイダ||湿地

**語源** 【nitat 湿地、やち】。子音語尾のtは聞き取れないので、nitatニタ||仁田。長音化で仁井田。ともに湿地帯だったところであろう。日本語の語彙はほとんど語源がわからないが、アイヌ語(縄文

語)は音節単位に意味を持ち、語彙はその結合で成り立つので、語源が明白であるものが多い。しかし、nitatは音節に分解したところで、その意味には結びつかないので、縄文語からの継承であるかどうか不明である。だが、奈良時代の『出雲国風土記橘縫郡』に泥湿地||沼田(ヌタ) ||爾多(ニタ) ||努多(ヌタ)の記事があり、あるいは、野田、牟田等、それらが皆当て字であることからすれば、それは縄文語の nitat→nitat→nutatと見られる。また、猪が体に泥などを塗りつける(ノタウチ、ヌタウチ、ニタウチ)湿地を、各地でニタ、ヌタと言い、そこに腹ばうことが、ヌタバル、ノタバル。「春の海ひねもすのたり(のんびり)のたりかな」の擬態語ノタリには、ノタル(群馬・岐阜・和歌山 這う)という即物的な縄文の目があったのではなからうか。

**転音** nitat→nitat→nutat→noda→muta

**所在** 高萩市赤浜・日立市多賀町に仁田沢、大子町下野宮・北吉沢に仁田場、西金に仁田、鹿島市田谷に仁多(ニタ)田。北茨城市関南町仁井田(ニイダ)は里根川と江戸上川の河口付近の低地。各地で湿地・泥田をニタ・ヌタ・ノダ・ムタ。

玉里御留川から

伊東弓子

今年もまた学窓を巣立っていく、沢山の若い人達が仕事を求める時期だ。就職率が低いというニュースが多いが、理由は何だろう。仕事に対する考え方も随分変わったようにも思う。農業、漁業、

林業を選ぶ人がいない。これからは仕事として考えられないのだろうか。田畑は隠居仕事、漁は趣味の範囲、山はシルバーに依頼という程度、きつい、汚い、金にならないと嫌がる風評もある。これからどうなっていくのだろうか。然う期う考えている時霞ヶ浦の漁の事を思い出した。

一昨年発行した「玉里御留川」の中にこの時期の出来事が載っているのを思い出し開けてみた。七十八ページ「第二節 玉里御留川の漁場、漁法と規制」の中の八十ページの五 寛文三年(一六六三)

(直編時代) 鯉豊漁につき鰯口奉納

鈴木七郎衛門伴

御川守

同 吉之丞

一源義公様の御代 寛文三卯年直綱御奉行小田七郎衛様のお勤めの時、不漁続きで水戸表へも何かその旨お話に行ったが、武井所左衛門様とお二人でお出でになって御留川のあちこちご覧になり、あれこれと御判断の上網を掛けられたが不漁だった。御奉行はとても気の毒と思われ、又御川守吉之丞も恐れ多いと、これはとても難しく人の力で叶える事は出来ませんので、当村御立山の内に愛宕社がございます。ここは霞ヶ浦より小川、高浜に入る舟、小漁船がみな目当てとしている所でございます。私この愛宕社に願を掛けたく存知ます 吉之丞は身を清め十七日昼夜、五町余りの道を一日一夜に式百度づつお詣りし大漁の願いを掛けた。十二月二十六日の夜数度お参りし、月が出る頃御留川の内を見ていると、愛宕下御留川に大鯉が四、五本飛上っている様子が見えた。喜び勇んで御奉行に話

し夜中網引達に支度させた。吉之丞一同網舟に乗り、愛宕下御留川に網掛をした。夜中働いた引子達に網場谷原で朝食を振舞った。二十七日夕方網を引いた。すると大鯉ばかり十六艘も引上げた。大鯉だった。この事があってここを拾六艘川と呼ぶようになった。その後御連上制(天和三年、直綱制から入札請負、運上金上納の制になった)になってからも先例によって拾六艘川へ網掛した時は網屋より朝飯を網場谷原で振舞われていた。

一右吉之丞大願成就仕候二付 両奉行衆より愛宕社へ鰐口御奉納被候事

鈴木七郎衛門倅

御川守

同 源太左衛門

右鰐口銘

(吉之上の弟)

願主 小田七郎衛門

武井所左衛門

奉掛愛宕山御宝前

西常劔伊原木郡多満利村

・御阿みバより 寄進

寛文四年辰

正月廿四日

鰐口奉納について経緯は以上ですが、文章の下欄に言葉の解釈がある。次ページには、その後の資料に基づいて、拾六艘川が十六日川となり今十六日という地名で残っている事、鰐口が光明寺に移り今は不明となっている事、伊原木郡(いはらき)おりは鍛冶屋の間違いで(ないはり)であると指摘し

ている事が記され、現在地の白黒の写真に十六艘川、大井戸前網引場、舟入、納屋場、女池、御川守宅、愛宕社、宮下、稲荷の森など文書と現代を関連づけて分かり易く記されている。この資料を基に多少勉強したのだから体験しなければと決心した。

この時期だから魚が捕れる。寒い中引子達は暖かい床から起き上がり何を纏い、何を被り、何を履きかけたのだろう。老いた者、幼い者、女達はこの働き手の男の力に頼って生きていたのだろうか。朝飯を食べた谷原は風があつたらうか、陽は登っていたらうか、その地を尋ねてみよう。

十二月二十六日は、平成二十四年一月十九日、月の出は午前二時四十二分である。愛宕神社(文書の中の愛宕社)迄二十分あればと計算し、目覚ましになるだろうと湯をガブガブ飲んで炬燵に着どる寝した。枕元で足を引きずる音がして

「もう行つて来たのか。鯉は飛び上がったか」

の声に私が飛び上がった。二時三十分だった。助かったと頬を被りをし着膨れになって坂を下った。新聞配達員がバイクで隣の家に止まった。向う場の街灯が点々と見える。高崎宿から浜通りを下玉里へ向かった。星は高い所に輝いていた。風もない石川台も左手の里山もどっしりと眠入っている。振り向くと高浜の町も筑波の山も沈黙の中だ。蓮田の水辺を小走りに行く鳥の声と羽音がする。影は見えない。日が暮れ夜が明ける大きな営みの中に包まれて生きとし生けるものが存在しているのだ、と思うと恐ろしくもない。寒くもなかった。唯こんな所で脳心臓障害で倒れたら、子供達にすまない。何としても家に無事に帰ろう。と今迄に思いもしなかったことを思い、平山から堤防に

上がった。月が玉造の台に登った様子が分かった。影は見えないが白い雲の中に黄色っぽい固りがあった。ああ感動の一瞬に間に合わなかった。でも白い雲があつては月の出の感動もなかったらうと自分の遅れたことに対して言い訳していた。稲荷の森も動かない。向う岸の終塚もそうであろう。

十六日、文書の拾六艘川と言われている田の所に立ってみた。コンクリートに打ち寄せる波の音が僅かに聞こえる。

愛宕神社の石段を上った。鯉の影はない。願掛をしない私に見える筈がない。電柱や木々の枝で十六日当たりもよく見えない。月も梢に遮られて見えない。感動や信仰心、美意識や人の心も、労働や時の流れの中で変わってしまうと思う。

神社を降りて通りに立ってみた。防波堤は水辺を見せてくれない。埋め立てられた拾六艘川に鯉の姿を感じてみようとした。

その周辺の谷原に朝飯を頬張る男達の笑顔を見つ、忙しく働く女達の姿を見ようとした。

網舟の上で揺れる奉行や川守、引子達は身分の差も忘れる喜びの一瞬が目に浮かぶ。

よかった。この時期にこの場所に来たことは形の変化はあつても感じるものはここでなければ感じとれないものだと思ひ、老いつつあれど私の中にはまだまだ何かを求めて止まないものがあることを一人自負している。

思いに耽っているといつのまにか黄金に輝く月があつた。左に上った二十六日の月は佛の月と聞く。阿修羅様と観音、勢至菩薩が乗っておられると思うと一層の輝きを放っている様に美しい、満足なひとときだった。

拾六艘川の漁場は終戦後埋められた。堤防が作

られた水田となって食料難の時代を救った。その後大量に豚を飼育する養豚場が出来、大いに経済も潤った。その後諸問題を抱え、やがて止める事になって廃墟のまま暫く放ってあった。農協の合併処前に処分し玉里村から今は市の物になって、削った土の置き場となっている。市の「水辺のいい」計画の一部に入っている様だが、おかしな建物などは絶対お断りしたい。この周辺には人家もあつたと聞く。大水に悩まされている事を知った藩がそれを憂い、その人達を西側（今の平山）に移住出来るようにしたという。土地の子供達が遊んで帰ってくる途中手を合わせてお参りしてくると土地のお婆さんから聞いた。氏神様があつた所かもしれないとのことだった。行ってみたら二ヶ所あつた。

愛宕神社は火の神を祠つてある。世話人が掃除をしたり一月には神主さんに来ていただいて祈願するそうだ。滝平二郎さんの切り絵の中にも登場する。私は小学生の時お祭りで相撲を見たことがあるが、今はその佛はない。社の森には巨木が何本もある。以前には子供達のよい遊び場だったそうだ。童話の世界に入り込むような所だ。社は古墳の上にある。石佛もある。戦国時代の館城もあつた（玉里八館の一つ）。周辺は平らで畑が続く玉里六畑の一つが東側傾斜地にある。

川守が愛宕社に願掛けのお詣りの時、登り降りしたと思われる道を通ってみたが、自転車や邪魔になるので一番遠回りの平らな所を帰ることにした。鈴木家（川井宅）前から市海道に入った。月が後をついてくる。私の周辺はまだまだ色彩はなく墨絵の世界だった。

この地に纏わる歴史を知る事はとても胸が騒ぐ。

あの役人も計り知れない苦労はあつたのだろう。川守も悩みや悲しみは突きなかつたろう。自然界の中で引子達の仕事と上からの締め付けの中での生活はどんなだつたろうか。いつの世も最下底で働き生きてきた人の多いことを考えていきたい。今も変わらない。あの華やか都市を支えている労働者が沢山いる。息子達もその一人だ。これからも社会を支えている一人である事を忘れないでいこう。若者達も一寸足を止めて考えて欲しいね。とペタルに力がいいた。文化センターの下でオートバイに合つた。県道に出ると車一台に合つた。そろそろ自然界も人間社会も活動に入るのだ。薄黄色になった月は動かず家の前の青桐の梢にかかっていた。私は沢山想いを抱いてこれから眠りに入る。

私は：信じない

小林幸枝

二、三年ぐらい前から、占いだとか心霊スポットなどが私の周りで言われたして、友人たちの中には人気のスポット巡りの旅などに出かけては、お守りだとか心霊の人形などといったお土産をもらつた。

でも私は、占いだとか心霊スポットなどには興味はないし、信じてもない。占いを信じている友人からこんなことを言われた。幸枝さんは健康運と金運がすごく良いと。でも全く当たっていません。金運も全く良くなかつたし、昨年十一月からは体調不良が多く大変だつた。

今、占いや神頼りの事などを考えていたら、「運

というのは神頼りにするものではなくて自分が創造するものだよ」と白井先生から言われたことを思い出した。「自分の人生は、自分が創るものなんですよ。誰かに与えられたりするものではないんですよ。人生の幸せとか不幸というのは自分がどれだけ創造力を働かせたかということでは決まりません」とは、先生がいつも言っていることでした。

別の友人から、『幸枝さんは今年運が回ってきません。オーラが出ています。今年はチャンスの年です』と言われた。占いを信じてはいませんが、運があるようなことを言われると矢張り嬉しくなり、無意識に期待をしたりしてしまいます。

チャンスというのは、もしかしたら去年から言われていた香港公演の話が本格化したことかな、と思つたりしてみます。去年の6月公演の時に柏木さんから「香港公演の話が持ち上がってきているけど：」という話を聞かされた時、現実味が薄く、そうしたことが現実になれば嬉しいな、ぐらいにしか思つていませんでした。

その時にも、白井先生から、絶対に海外公演をやるぞ、と思いつけて努力したら実現するのは意外と簡単です。それを思い続けられるかどうかと、それに向かつて自分のできる行動をすること、と言われました。だから、友達の言う今年には運氣があるというよりも、舞台に関係する人たちが皆で、自分のことを一生懸命にやつて来たからだと思つています。

運の後押しもなければいけないでしょうが、まずは自分たちのできる、やれる努力をしなければ、運氣があつても何も実現しないだろうと思えます。

あなたは占いと心霊スポットなどを信じますか？ 私は：信じません。

更科公護著「常陸の青屋祭について」より民俗行事としての青屋箸について更科氏の原文を紹介して参りました。今回は、当会報昨年（2011年）の十二月第六十七号青屋箸（五）より続きまして原文、最終までのご紹介となります。

『七月上旬の神事は、我朝第一之祭例三韓降伏天下泰平之大神事也。具に慶神天皇の巻に見えたり。昔彼異国之王の頭を鉾に貫き大路を渡り、先陣後陣相共に総て八童神の楯板を築き、神宮等甲を帯し、兵伏を捧ぐ。是偏に神功皇后、応神天皇三韓降伏の祭事、天地も鳴動し、神兵並に参詣数萬人一心に掌を合せ異口同意に 叫ぶ 天上にも響き、堅牢地神無間大城も一侍に騒ぎ、四大海竜宮も驚き、大小之諸神同心に力を合す。神軍の威力にや、御即位大嘗会に異ならず。

御社面へ走集り、貴賤甲乙の諸人、身の毛を余立て、如何なる邪魔外道魔神波旬も退散し給うべし。当社の御誓願也。然るに此の祭事を諸神官等、大小の諸人、山野の住民海浜の白郎に至るまで、大形に念想し奉るに於ては、邪神気を長じて、世上災難を得風雨の災を清け、五穀の熟せざる事多かるべし。

なお七月上旬の神事は、古くは七月七日に御船祭として行われたものであって、その後十日となつたが、祭りは朔日に始まり、七日には有名な、霊剣を載する式がある。十日にひきつづき十一日には御船祭が行はれる。

さてここで再び問題の六月二十一日という日を考えてみよう。大祭を熱行するには、当事者は必

ず身を清め、幾日間は物忌みに入るのが例となっている。祭典が大きければ大きいほどその期間も長いわけで、六月二十一日は七月朔日のちようど旬日に当たる。したがってこの日は物忌みに入る最初の日であったのではなからうか。常陸大掾家ではこの祭りに奉仕するためとくに精進代官をおいた。精進とは仏教的な語であつて、神道の禊である。禊をするのであるから、清い草であるスキで造つた飯屋に奉斎する神は当然祓戸の神であらねばならない。祓戸の神とは、すなわち祓いを行う場所を守る神であつて、瀬織津姫命、伊吹戸主命、速秋津姫命、佐須良姫命の四神である。なお瀬織津姫命は八十禍津日神ともいって、伊弉諾尊が阿波岐原の中津瀬に降りて禊をしたとき垢から生まれたという神で、疫神の総元締の神である。また一説ではこの神を天照大御神の荒魂ともいわれているから、石岡の総社神社の末社である青屋神社の祭の天照大神というのも正しいわけである。

青屋祭は、新編常陸国誌では府中の青屋祭より出たとあるが、六月二十一日が物忌みに入る始めの日であるとすれば決して府中だけではなく、鹿島神宮自体も厳肅に行われていたはずである。ただ神宮では神苑内で秘かに執行されるので人目につかなかつたのであろう。あるいは青屋よりもつと古い型のものを造つて祀っていたのかもしれない。また常陸大掾も初めは石岡ではなく、おそらく高浜の渚で禊をして、付近（現在の高浜神社ではないかと思う）で青屋祭を行ったことも考えられる。

なお供物のうどんについてちよつとふれてみよう。うどんは初めから供えられたとは思えないが、季節的にはちようど小麦が収穫され、ナスやウリと同様初物にもなる。うどんは汁を別にした白い

## 2012 CONCERT SERIES

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。どうぞよろしく願いいたします。

- 3月 4日 鈴木大輔 ギターリサイタル
- 3月 11日 《ARC》タンゴトリオ コンサート
- 3月 18日 新井伴典・松田弦ギターデュオリサイタル
- 3月 31日 クエンカ兄弟ギターとピアノコンサート

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35  
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、  
また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい、自分の風の声を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。  
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465  
Tel0299-55-4411

うどんを食べるが、昔は白いうどんというのは夏のハレの食物であって、平常は煮こみうどんとして食べたのである。したがって特例である久慈郡大子の青屋様は旧の八月一日であるためすでに秋に入っており、うどんは作らず赤飯をふかして供えている。また青屋様の日に食べるうどんは、夕食に食べるというのが多いが、昼食に食べるのも少なくない。青屋祭は一種の大祓いであるから、忍男神社の青屋祭の例から損せば、諸神社で行う茅ノ輪神事も申の刻(午後四時~六時)から始められることから、供えたらうどんは夕食に食べるのが本来のあり方である。こうした小さなところにも変遷のあとがうかがわれる。

しからば六月二十一日の行事がどうして一般庶民の行事となったかという点、これはさきに引用した七月上旬之神事の「此の事を諸神官、大小の諸人、山の住民、海浜の白郎に至るまで大形に念想し奉るに於いては、邪神気に長じて、世上災難を得、風雨の災を清、五穀の熟せざる事多かるべし」云々が利いているものと思う。これを伝えひろめたのは、おそらく鹿島神宮で毎年春、神託によりその年の吉凶を全国にふれあるたいわゆる「鹿島の事触」であろう。とくに常陸国中この祭りに参与させるため真剣に宣伝したのであることが想像される。であるから青屋箸の行事は県内でも常陸国がほとんどで、茨城県に偏入された下総国の一部である、結城・猿島・北相馬の三郡にはきわめて少ない。しかも日は七日とか十五日という一般とは異なった日で行われており、これらの点からみても常陸の青屋祭は鹿島神宮と密接な関係のあることが察せられる。

最後にしめくくりとして青屋祭とススキについて

でもう一度考えてみよう。青屋の名称は青いススキで神を祭祀する仮屋を造ったことに起因することはいままでもないが、その青屋祭にススキの箸で食物を食べる行事がはたして最初から鹿島の祭典のために行われてきたかという点、これはきわめて疑問である。たまたま近年まで一部の土地で見られたススキを数本まとめてサギチョウのように庭に立てる例は、これはとりもおさず葦塚のなごりであって、古くから神の依代となるヤマを象つたものである。そして葦塚にはとくに祓戸の神である疫神が祀られる。忍男神社の青屋祭が夏越えの大祓いであることと併せ考えれば、青屋箸の行事は鹿島神宮の祭典とはべつに、夏越の祓いの一つの行事であつたのが、目的が同じであるため常陸国中をあげての鹿島の祭典のために分化したのではないかと思う。

また青ススキの仮屋も最初から屋金が造られたのではなかったかもしれない。屋金に変わったのは、あるいは諏訪大社の御射山祭から諏訪信仰に影響されたのではあるまいか、そうするとススキの箸もあるいは諏訪信仰によるのかもしれない。信州の中部では七月二十七日に、青箸の年取りとかミサヤ様などといってカヤの箸で粥を食うそうだが、やはり疫病を防ぐ行事であり、千葉県下で行なわれている新箸の祝いの日である二十七日というのも、諏訪信仰に関係のある日である。常陸大掾が滅ぼされ、府中の青屋祭が中絶されて数星霜、そのなごりを止めてただススキの箸を神に供える行事だけとなった常陸の青屋祭には、まだまだ幾多研究の余地が残されている(一九六三・一〇稿)

水戸市の富田様より、お住まいの地区に青屋箸

で鰻鮓を食する風習があり、石岡の青屋神社との関連性を尋ねてこられ、当、ふるさとの風会員打田さんから一説を語って頂戴した(当会報六十三号)。そして富田様からご提供頂いた「茨城の民俗」より更科公護著「常陸の青屋祭について」の資料から各方面で行われている青屋箸について知る事ができました。

鹿島誌や新編常陸国誌などに示されている時代の背景の中から生み出された、自然への畏敬の念と身を守る為の、無病息災、悪霊退散、そして五穀豊穡を願う、民俗行事として、絶える事なく後の世に引き継がれますように念願しています。

・裸本 おおはしやぎ白い妖精  
・ほつり春のえがお

ちえこ

## 《特別企画》

本来はこのコーナーは打田昇三さんの「虚構と真実の谷間」第四章・霧の中の栄光(1・3)を掲載予定でしたが、NHKの大河ドラマに平清盛がはじまり、石岡市の人たちの中に少なからず平家物語に失望したとの声を聴くにあたって、石岡市の大方の人の認識である「桓武平氏発祥の地(平国香の墓など)」説への疑問について打田さんに急遽、打田史学流検証文を書いてもらい掲載することになりました。

歴史の里と冠しているにもかかわらず、でっち上げの伝え物語と検証を忘れた勝手な思い込みだけでふるさとを自慢しようとしても、それは無理というものである。

この編集者はNHK嫌いではあるが、ドラマ平清盛に関してはNHKを（こいつより、ドラマの作家を）支持するものである。大河ドラマに失望したという人たちに、源・平の両姓の始まりについて果たしてどれほどの人が認識しているであろうか問うてみたい。

平国香は国府に勤務はしていたが、この石岡に住居を構え、この地に暮しを創造し、持ったわけではない。つまり、国香にとっては役所のある勤務地にすぎないのである。

さて、これを踏まえて打田史学では平家をどう検証、考察するのであるか。

### 正しく伝える物語

打田昇二

「講釈師見て来たような嘘をつき」という川柳がある。講談の種は大部分が時代ものであるから誰も現場を見ていない。嘘でも滔々（とうとう）と喋（しゃべ）られると「もしかして、これが本当なのでは…」と思いつくことになる。新聞も雑誌もラジオ・テレビも無かった時代には、当時の人が見聞いたことを次の世代が把握してこれを後代に伝える。人間の虚栄心は、どうしても伝える者の有利な話にするから内容も徐々に変わって尤もらしい嘘が仕上がることになる。

何度も合戦で焼かれたり失火で燃やされたりした石岡の町は、残念ながら伝えられる「昔」の記録が江戸時代辺りを限界とするようであるから、其れ以前のこと古書の記録や長老の口承に頼る他は無い。言い伝えにも個人的主観が入り、さらに地位や権威のある人物、主人公に関わりのある子孫などが伝承を分析して「こうでは無いか？」

と自分の意見を出す。誰も祖先のことを誇りたいから良いことばかりが浮き彫りにされて、それが何時の間にか「言い伝え」という結論になってしまおうらしい。その例が「常陸大掾平国香が石岡に城を築いた…」とか「石岡には平国香の墓がある…」などの虚説になり「桓武平氏発祥の地説」まで飛び出す。戦国時代末期まで府中城には大掾氏が居たけれども、それが桓武平氏に繋がるには少し距離が有り過ぎるように思える。

昔の石岡を知る史料は少ないが昭和六十年代に石岡市教育委員会が出版した「石岡の地誌」は主として江戸時代に書かれたもので昔の石岡の記録を編集した貴重な史料ではある。然しながら此の本に収録された内容を百%信用することは出来なと思う。なぜならば例えば笠間藩士の学者が著した「答問説」には「国分寺や国分尼寺は役所の一部であって、尼寺だから尼さんが居たなどと考えるのは誤りである…」と堂々と書いてある。国分尼寺に尼さんがいて、平将門が常陸国府を占領した際には乱暴な兵士により丸裸にされた一雑兵は貧乏な農民が主体であったから、尼さんが身に着けていた綺麗な着物が欲しかっただけ…と思うのだが、裸にされた以上はどうなったか知らない…とにかく尼寺に尼さんが居たことは「将門記」に書いてあり、現代では誰でも知っている。

石岡市は「歴史の里」と言われているらしいが、他所の方から何が歴史なのか？と聞かれると答えに窮することがある。一般的な回答としては、かつて「常陸国府」があり、それに伴って「常陸国分寺、国分尼寺」が置かれていた。誰の墳墓か確定はされていないが、日本に二十万基以上ある古墳の中で四十何番目に大きい（東国で二位、県内では

一位「船塚山古墳」があり、そして市内では唯一の山であった「龍神山」には、大和王朝の原点とされる三輪山神話を伝える伝説が残っていたし、国府の在った場所は後に「府中城」となり城中の鈴ヶ池には落城に伴う秘話があった…と答えたいところであるが、現実には厳しい。

国府の跡は小学校になり、鈴ヶ池は私有地となってビル解体の廃棄物で埋められ、国分寺は一般の寺になって観光客の駐車も出来ず、国分尼寺は只の草原でしかなく、船塚山は被葬者が分らないから歴史的价值も分らない俣で既に不心得者が盗掘済みであり、龍神山は道路工事用の採石場として立派に生まれ変わった。これでは「歴史」の里の看板が泣くと思うのだが…歴史は観光と単純に考えるのも気が引けるけれども、その場所なり由来を誰かに知って貰いたい…と思えば其処に何かが残っていてそれ相応の対応がないとお客さんは来ない。つくりごとでもゲゲゲの鬼太郎は立派に観光の役目を果たしている。

そこで古墳時代～奈良時代を諦めた「心ある人々」が主張しているのが「桓武平氏の里」のようである。NHKも石岡の住民の期待にこたえるべくドラマの放映を始めたのだが、何とテレビに映し出されたのは、掘りたての芋のように泥にまみれた平清盛の姿であった。主人公の清盛は白河法皇が白拍子（端的に言えば遊女）に生ませた男児であり、それを伊勢平氏の忠盛が自分の子として育てたという設定である。

平清盛の母親についての記録が残されていないことから白拍子であったとする説はかなり以前から歴史学会でも支持されているようである。ただし白拍子と言っても格式の高い…遊女は遊女だと

言ってしまえば身も蓋も無いが：白河法皇が寵愛した祇園女御という白拍子の妹とするのが通説らしい。そうすると平清盛は桓武平氏とは全く関係の無い人物と言うことになる。清盛が白河法皇の御落胤とする説は割と支持されているようで百%ではないが史実に近いらしい。

歴代の天皇には大勢の子があり、その中で皇位を継げるのは一人であるから男児は皇族にするか臣下に下すか、仏門に入れるかの選択がなされる訳であるが、その中で蚩ではないが、なぜ源氏と平家が知られているのかと言えば、この両氏が天皇の代わりに軍事を担当するように宿命付けられていたからである。つまり本来は非常の際に天皇が自ら兵を率いて戦場に赴いた。それを補佐して参謀や將軍として働くのは藤原氏の務めなのであるが、娘を天皇の後宮に入れて出世を図った藤原氏は次第に柔弱化して、敵兵どころかゴキブリ一匹も退治できなくなっていた。そこで皇族を民営化した源氏と平家とに命懸けの軍事を担当させることにした。公卿どもは偉そうにしているだけで良いようになった。源氏・平家も幾つかの流派があったのだが「馬鹿らしくてやつてられない！」と廃業した者も居て、結局は「桓武平氏」と「清和源氏」が残り、対抗するようになった。源氏と平家は商売仇であるから仲良くは出来ないの、頼山陽も「日本外史」で「：是の時に當りて、源氏に命を梗（ふき）ぐものあれば、平氏に勅して之を討たしめ、平氏に制し難きものあらば、源氏をして之を誅（ちゅう）せしむ。更々相箝制（こも）もあいかんせいして、以て控馭（こうぎよ）の術（すべ）を得たり：。」としている。

平清盛も武士の子として育てられたから、馬鹿公

卿に忠実なふりをして徐々に力を蓄え、遂に朝廷を抱き込んで天下を取ったのである。

平家物語の巻第一「祇園精舎」には、平清盛について「：其の先祖を尋ぬれば、桓武天皇第五の皇子、一品式部卿葛原親王、九代の後胤讃岐守正盛が孫、刑部卿忠盛朝臣の嫡男なり。彼親王の御子高視の王、無位無官にして失せ給ぬ。其御子高望王の時、始て平の姓を給つて、上総介になり給しより、忽に王氏を出て人臣につらなる。其子鎮守府將軍義茂、後に国香と改む。国香より正盛にいたる迄六代は、諸国の受領なりしかども、殿上の仙籍をばいまだゆるされず」と書いてある。

後裔ではあるが桓武天皇からは何代も下っているの、これを「桓武平氏」と呼ぶには無理があるように、平家物語も「：柏原天皇（桓武天皇）の御末とは申ながら、中比（なかごろ）は都のすまひもうとうとしく、地下（じげ）昇殿を許されない下級官僚（かき）のみ振舞なつて、伊勢国に住国ふかかりしかば、其国のうつは物に事よせて、伊勢平氏とぞ申ける」としてある。はっきり言わせて貰えば、本流の平家でさえも桓武平氏とは言えなかつたのであるから、石岡に居た末流の吉田系馬場系の大塚氏を桓武平氏と呼ぶには無理があるように思えてならないのである。

桓武天皇の子（母親が藤原氏では無いので皇位を継ぐ可能性は全く無い）葛原親王には二人の男子が居た。高棟（たかむね）王と高見（たかみ）王である。高棟王は早くから臣籍に下り「桓武平氏」を称していた。本来はこの系統が平氏の源流になるのだが、代々が都に居て中級官僚に徹していたからマスコミには知られていない。平清盛夫人徳子の家系である。

葛原親王の子である高見王は皇族の末流として

放つて置かれた。若くして亡くなったと推定されているが無位無官であった。葛原親王は文徳天皇の仁寿三年（八五三）に六十八歳で他界したのだが、高棟王以外の子や孫を臣籍に下して欲しいと何度も朝廷に申請をしていた。しかし皇族を臣下とする場合には「平」の姓だけ付けて：と言う訳にはいかず、それ相応の就職も世話しなければならぬから簡単では無い。歴代天皇の子や孫で降下待ちの者が落下傘部隊ほどいたのである。

桓武天皇の後、皇統は葛原親王の異母兄弟たち四人が継ぎ、其の後は嵯峨天皇の子孫が繋いで源氏の祖とされる清和天皇に至った。清和天皇の息子が「筑波嶺の峯より落つる男女の川恋ぞつもりて淵となりぬる」の歌を作った陽成天皇である。遙か年上の叔母さんだか従姉妹だか、皇族の女性に恋して詠んだ歌らしい。九歳で即位して八年で退位させられたと、言うよりも自分で「私はオカシイから辞めます」と辞表を出して隠居暮らしを六十五年も続けた。退位の理由が乱行の所為にされているが、この歌に見る限りはマトモであるから、政治的な裏があるのかも知れない。

文徳天皇も清和天皇も三十代で亡くなっており、陽成天皇がリタイアしたので皇統は文徳天皇の弟まで遡り、五十五歳の時康親王こと光孝天皇が即位したけれども、高齢であったから三年で亡くなり皇太子も決まって居なかつた。時の権力者・関白の藤原基経が探し出したのが、民営化で源氏の姓を貰い公務員になっていた光孝天皇の子・源貞省（みなもとのかさみ）である。時に二十三歳、関白とか腕白とかいうのは他人の言うことを聞かないものであるから、強い反対も無くて藤原基経が押す源貞省青年が第五十九代の宇多天皇として即位

することになった。この天皇の母親は桓武天皇の孫の班子（ほんし）女王である。

茨城県には来たことも無いのに「筑波嶺の…」と立派な歌を詠んだ陽成前天皇は、源定省が天皇になったと知って「俺が天皇で居たときに下っ端でチヨロチヨロしていたアイツが天皇か！」と憤慨したらしいが、辞めてしまえば齒が立たない。

宇多天皇は祖父（桓武天皇皇子・仲野親王）の兄弟である葛原親王の子が無位無官で置かれるのを気の毒に思っており自分のように民営化で活躍の場を与えようと考えていたと推測される。清和天皇の時代に仲野親王と平高棟とが同じ年に亡くなっているから、その葬式で顔を合わせた桓武天皇系的人物が、忌中払いの酒を飲みながら就職活動の話をしていたかも知れない。その時代：清和天皇の時代代りから都を始め地方にも盗賊が出没して治安が悪く、また東北地方では収まっていた先住民の反乱が目立つようになっていた。さらに大陸から後の元寇のように異民族が日本近海に押し寄せてくる兆候があつて、その時代の日本は辺境の警備が重視されていたのである。

宇多天皇になつた源貞省（源氏でも清和源氏ではない）は、かねて就職を気に掛けていた高望王のことを思い出して皇族から離れた上で東国の安定を図る仕事をして貰おう…と思つた。皇位に就いてから、先帝の葬儀やら公家どもの苛めやらで忙しかつた宇多天皇は、ようやく自分の政治が出来るようになり数年後には菅原道真を登用する。かくして寛平元年（八八九）五月十三日、天皇に呼び出された高望王（たかもちのおおきみ＝桓武天皇の曾孫）は姓を貰つて平高望となり目印に赤旗を用いるように言われた。初めて平家になつたのであるから、この人が

桓武平氏の祖でなければならぬのである。

平高望は官位・従五位下に叙され、上総介兼常陸大掾に任じられて東国に下つてきた。上総介は正六位下が、常陸大掾は正七位下が相場であるから破格の人事になる。上総も常陸も親王の任国で大守は現地に來ない。宇多天皇皇子の齋世親王は上総守在任中に死亡している。祖父の葛原親王も常陸守に任命されたことがあるので高望は役人どもにチヤホヤされて住み心地は良かったらしく、任期満了後も都へ戻らなかつた。上総の国府と常陸の国府を行ったり来たりしていたのであろう。

高望の息子・平良望（国香と改名）も父親の筋で常陸国の地方官として勤務することが出来た。国香の職は常陸大掾であり、父親のように上総介にはなれなかつたが、世の中が物騒になつてきたので鎮守府の將軍に任じられた。数年間だと思つたこの職務期間中は現地に行つていて常陸国には居なかつた筈である。国香が父親と同じ従五位下になれたのは、この將軍職に任命されたからであり常陸大掾だけだと七位で終わる。

石岡では、本来の桓武平氏始祖である父親の高望王こと平高望よりも息子の国香を平家の始祖にしたがる—と言うより国香が有名な理由と思われることが幾つかある。それを挙げてみると：

其の一は、鎮守府將軍になつたことが過大評価されている。この職務は仙台近郊の多賀城に置かれ後に胆澤に移された鎮守府の將軍であるから、東北方面軍司令官のようなもので官位は少納言と同じである。平将門の父親もこの職に任じられた。

其の二は、石岡には平国香の墓がある…とする俗説が伝えられていることで、平福寺にある大掾氏累代の墓所に一基だけ大きい石塔らしきものが

存在するので、それを国香の墓に当て嵌めているらしいが何の根拠も無い。常陸国の昔を記録した唯一の書とも言える「新編常陸国誌」には平福寺の開基の墓としている。此処は水戸から來た吉田系馬場系大掾氏の墓所である。平国香は東石田に館を構えていて、将門に仕掛けた戦に負け、館に逃れたところを攻められて自殺したのであるから、どう考えても石岡に墓所がある筈が無い。或いは「石田」と「石岡」を勘違いしたのかも…。

其の三は、主に源氏礼讚記事である「前太平記」に平将門の乱のことが書かれていて、国香と将門とが藤代で合戦したとか、国香は負傷して土浦城に戻つてから死亡したなどである。その中で国香が軍勢を集めるのに府中、稲吉、中村、牛久から召集した…となつているので親近感があるのかも知れない。しかし国香の時代に石岡が府中などとは呼ばれていなかったであろうし、国香は常陸大掾の職務で石岡の常陸国府に通勤（毎日では無いと思うが…）していたに過ぎない。

其の四は、平高望は上総介に兼ねて常陸大掾に任命されており、常陸国府に常駐したのでは無いと推定される。常陸国には自分が開発した領地だけが有り、上総国に国主の館が置かれたであろうから石岡には馴染みが薄い。その点、国香のほうは東石田に館は在つても、石岡に官舎があつたのかも知れず、何となく身近な人物と錯覚する。

其の五は（これが一番の理由かとも思うが）石岡には水戸から來た吉田系馬場系大掾氏の家臣であつた旧家が多い。滅亡したとはいえ大掾氏を名門にして置きたいが皇族から臣下となつた高望よりも此の地に定着した国香のほうが身近である。

其の六は、平将門軍に依つて常陸国府の町が焼

かかれているため（千年以上も昔のことであるから、既に時効は成立しているが…）市民としては将門に恨みがある？その将門に攻められて自殺をした平国香に同情が集まり桓武平氏の祖とされる？

其の七は、其の二に挙げた「新編常陸国誌」に収録された古書には「香の大掾」と言う文字が多く使われている。これは「国府の（こふの）大掾」のことではないかと考えられ、当て字に「香」を使った。旧町名に「香丸」があつて、親しみの有る文字だったのか？其処から国香が連想されて、何となく大掾国香が始祖である…とする言い伝えが広まっていたのではないか。

其の八は、明治四十三年に出された「石岡誌」に平福寺の記述があり「…代々の五輪墓石十五基あり…当寺は常陸大掾詮幹入道浄永の建立せしものにて…詮幹諡（おくりな）を平福院殿詮山香大禅門と云うに因みて、寺号（平福寺）とせしなり…」と書かれている。歴代の主に「詮幹」は居ないが「高幹、詮国」は室町時代の第一次滅亡時の主である。この戒名にある「…香大禅門」を国香のものとして錯覚した可能性はある。

何れにしても思い込みの世界であるから、どうでも良いことのように思われるが、歴史というのは単に石岡だけの問題では済まないから、不自然なこと矛盾があることは注目して置くことが「ふるさと」風「の会」の目指す歴史文化の再発見と創造であると述べておきたい。駄目押しではないが、百科事典（JAPONICA）には平国香について「…後の時代に活躍した伊勢平氏・伊豆北条氏は彼の子孫…」という記述があり、高望（高望王）については「…いわゆる六波羅政権を樹立した平清盛らは高望王の系統から出ている。…東国一帯

に広がった桓武平氏は後に坂東八平氏などと称され…」とあるから、桓武平氏の始祖を言う場合には高望王こと平高望まで遡るべきであろうと思うのである。

始まりが高望王でも平国香でも、兎に角、桓武平氏の流れを戦国時代まで伝えてきた常陸国の豪族大掾氏は、将門を滅ぼした平貞盛の系統では無く弟（繁盛）の子孫なのであり、かつ途中からはさらに末流の吉田氏系・馬場氏が源頼朝に言われて入り込んできた。本来は国香の息子である貞盛が常陸平氏の頭領として筑波山麓に住むべきなのだが貞盛は常陸国を馬鹿にして家督を弟の繁盛に譲り都へ上った―元々、貞盛は左馬允（さまのじょう）馬と牧場を管理する役所の係長級の職に就いていたから復職したと思われる。妻は平将門を待ち伏せして敗れた常陸源氏の姉か妹らしい。

都ではこれもまた本来は桓武平氏本流となるべき平高棟の子孫が既に藤原一族に混じって中・下級官僚として宮仕えをしていた。それから六十年後ぐらいは源氏物語を著した紫式部、枕草子を書いた清少納言、歌人として知られた（大掾氏と繋がる）伊勢大輔らが活躍した時代であるが、平高棟系桓武平氏の子孫が、藤原道長に苛められていた一条天皇の皇后（藤原定子）を助けて自分の屋敷を提供したりしている。

平将門追討の功績で名を挙げた貞盛は、役職が左馬允から右馬介（うまのすけ）になった。同時に官僚ながら軍人としても評価され、天慶九年（九四六）には鎮守府將軍に任じられ従五位下の官位を得たので、常陸国を飛び越えて東北地方へ行くことになった。任期は数年と予想されるが、後に再任されたようなので東北の暮らしが良かった？そのようなことなら常陸国に居たほうが良かった

ろうに…田舎暮らしを嫌い祖父・高望や父・国香が苦勞して開拓した常陸国を捨てて都に上った罰―と言えば平家びいきの人に怒られるかも…。

貞盛は親戚の若者を何人も養子にしたらしいが自分の子と思われるのが維衡（これひら）、維敏、維将（これまさ）、維叙（これのぶ）の四人でありいずれも常陸介（事実上の国司）を歴任し、上野、陸奥などの国司も経験している。また維叙の妻の一人（當時は複数の妻が一般的）は藤原為時の娘であり、その兄か弟は紫式部の父親である。平氏の家督を継いだのは維衡だと思われる。なお維将の子孫が後に源頼朝夫人・政子さんの実家（北条氏）と言われているが、それが事実ならば歴史は何とも皮肉なものである。

「桓武平氏」とは名ばかりで、藤原氏全盛時代であるから諸国の国司とは言っても都の官僚社会では「その他大勢」にしかならない。そう言った社会で維衡は、朝廷も藤原一族も手が出せない神様を活用することを思いついた。日本人の尊敬を集める伊勢神宮の聖地（伊勢国）を自分の領地にすることである。維衡が伊勢の国司に任命されたのは源氏物語が書かれていた頃の寛弘三年（一〇〇六）とされているが、それ以前から、どういう手段を用いたのか伊勢国にチョッカイを出し始めたようである。藤原道長の全盛時代である治安元年には常陸介に任ぜられ、他にも陸奥、出羽、伊豆、下野、上総の国司も歴任したらしいが、その間にも着々と伊勢国の開発を進めたようである。

「今昔物語集」には「平維衡、同じき致頼、合戦して咎を蒙りし語（ものがたり）」が収録されており、同じ平国香の子孫である平致頼と伊勢国内の開発を巡って争っていた。これが問題となって処

罰されたのだが、維衝のほうが軽い罪で済んだらしい。然し、それが原因で折角、伊勢守に任官しながら藤原道長に数か月でやめさせられた―と史書は伝える。そうした挫折にもめげず、維衝やその子孫たちは伊勢国の領地化に専念して、遂に「平家物語」にあるような「伊勢平氏」の地位を得たのである。伊勢国に於ける桓武平氏の土着地は明きらかでは無いが、学者により現在の三重県津市西方地帯と推定されているらしい。

平維衝の曾孫である正盛は、主に西国の国司を歴任し、八幡太郎義家の嫡男である対馬守・義親が起こした反乱を鎮圧して武名を挙げ、更に白河法皇の皇女で亡くなった媍子(ていし)内親王のために建てられた八条院に領地を寄進して法王の信任を得た。この人物が「伊勢平氏」の名を上げたことになる。正盛の子が「平家物語」の冒頭で活躍する平忠盛である。この頃には既に「桓武平氏」とは呼ばれていない。

時代を承平・天慶の乱が収まった頃に戻すと、常陸国に於ける「平氏」の家督は弟の繁盛が継ぎ、その子孫は多気氏として筑波山麓に屋形を構え、職務として常陸国の判官職である大掾(正七位下)太政官(言えは少納言の下の外記よりも下)を金の力で世襲していたから職務の名称を「姓」にして大掾を称するようになった。官位は低い、旨味のある職務であるから資産(主に領地)を貯め込んで日本一の金持とまで言われた。

現代でも財産を貯め過ぎると税務署や盗賊に狙われるように、この場合は源頼朝や北条氏、それにライバルの小田氏に狙われ、曾我兄弟の賛助出演による田舎芝居に事寄せて大掾氏はアッサリと潰されてしまった。ただ常陸国には頼朝が信奉し

た鹿島神宮があったから、律令制度時代の遺物である祭祀を所掌する大掾氏の職務も必要なので、頼朝は大掾氏の末流に当る水戸の馬場氏を後釜に据えた。この場合、馬場氏が早くから頼朝に大量のゴマを贈っていたことは推定できる。こうして馬場氏が大掾氏として石岡に乗り込んできたのである。当時の警察当局は「大掾本流の没落事件」について、馬場氏の関与を疑っていたらしいが、確たる証拠が見つからなかったであろう。

その家系は、潰された義幹の曾祖父(繁幹)から分かれた吉田清幹の子・盛幹の次男・家幹から更に分かれた馬場氏であり、家幹の次男の資幹が吉田郷内の馬場に分家したものである。大掾氏と言っても末流である。大掾一族は雑草の根のように常陸国内に広がっていたのである。従って本流を継いだとは言っても、これを「桓武平氏」と称するのは、既に述べたように少し無理があるように思えてならないのである。

富士の裾野の仇討事件が起こった頃には水戸城は未だ無く、水戸市史によれば、地元の小豪族に過ぎなかった大掾一族・吉田氏の馬場があったよううで資幹が馬場氏を名乗ったのもそれに由来すると思われる。やがて大掾氏として府中に進出してきた馬場資幹の子孫は水戸と石岡を領して鎌倉時代、南北朝時代、室町時代とそれなりの浮き沈みを経験しつつ全体としては徐々に衰退していった。そして喰うか喰われるかの戦国時代を迎えたのである。

戦国時代を模範的に生き抜いた武将と言えば伊達政宗である。彼は日本統一を夢見つつ、先ずは東北地方を制覇しようとして鎌倉以来の名門である葦名氏を倒し、会津盆地と黒川城とを手中に

した。黒川城の歴史は波乱万丈であるが、多くの示唆を含んでいる。葦名のバックには豊臣秀吉が居たからクレームがついて政宗は米沢に遷され、会津地方には秀吉がお気に入り若者である蒲生氏郷が入ってきた。氏郷は葦名時代の城を廃して其の地に本格的な城格を築いた。それが名城と噂された「鶴ヶ城」である。氏郷は名城に居ること二年にして病死し、蒲生氏は宇都宮に遷され慶長三年に越後の上杉景勝が鶴ヶ城の主となった。

上杉の重臣・直江兼続は鶴ヶ城を見て「立派な城の割には護りが完全では無い」として大規模な改築を始めた。これを知った徳川家康は国税局のように査察を申し入れて来たが、景勝は「天下の主は秀頼公であり、後見役の徳川から咎められる筋は無い!」と言って使者を追い払った。関ヶ原の合戦は、このことが切っ掛けで起こったようなものであるけれども、徳川方が勝ってしまったために鶴ヶ城に籠っていただけの上杉景勝は大減封で会津から米沢へ遷されたのである。

その後、二人ほど城主が変わってから徳川家光の代に出羽山形から二十万石で会津に来たのが徳川時代屈指の名君と称された保科正之である。この人は將軍の異母弟で幼名を幸松丸と言った。二代將軍(秀忠)の正室が有名なお江戸の方で気性が激しく嫉妬深く、秀忠もやっと思つた側室に生ませた幸松丸を江戸城内では育てられないから老中の土井利勝が、武田信玄の息女で家康に庇護されていた奈津姫に頼んで育てて貰い、その縁で信州高遠三万石の保科家の養子に迎えられた。

保科氏は信濃源氏で早くから徳川に従っていた家系である。後に家光が異母弟と知って会津に封じたのである。家光に恩義を感じる正之は「会津

藩は將軍への忠勤を第一とし、徳川家を護る楯となること」を家訓として残した。やがて二十八万石に増えた幕末の会津藩主が、京都守護職として新撰組などを管轄した松平(保科)容保(かたもり)である。この人は尾張徳川家の分家から養子に入つたらしいが、性格が藩祖・正之に似ていたと言われる。

権謀渦巻き過激なテロの横行する中で、都の守護に心血を注ぎ、明治天皇の父帝である孝明天皇から全幅の信頼を受け、下賜された天皇直筆の書と衣服、太刀などがあるらしい。ところが、孝明天皇が暗殺され、一番に天皇から信頼されていた藩主・容保と会津藩は明治新政府(薩長など)から朝敵として戊辰戦争をしかけられ、苦難の道を歩む。この辺が何とも怪しいところで、明治維新も結局は国民とは無縁の謀略革命だったのである。慶応四年(明治元年)八月下旬からほぼ一か月に亘つて鶴ヶ城は官軍の総攻撃を受けた。十万と言われる敵に対して城方は五千三百余、数の上からも勝ち目は無い。婦女子まで三千人以上の犠牲者を出して会津藩は降伏した。この時に連日の砲火を浴びながらも鶴ヶ城は落城せず、さすがに名城と称賛された。明治七年、時の軍部は鶴ヶ城の破却を命じてきた。暴虐の限りを尽くした官軍から光榮有る帝国陸軍に変貌するために古傷を消して置くとする魂胆である。

会津藩の象徴、歴代藩士の誇りであった鶴ヶ城は解体処分の為に競売に付され、その落札価格は八百円ほどと伝えられる。勿論、当時の八百円は高額であろうけれども、熱海の海岸で貫一さんを振つたお宮さんは三百円の指輪に目が眩んだと言われるから、億の値段ではなからう。時代は過ぎ

て昭和四十年、会津市民は凡そ一億二千万円を掛けて現存する鶴ヶ城天守閣を復元したのである。

鶴ヶ城と言えば思い出すのが「白虎隊」の少年たちであるが、出陣していた彼らは城に戻ろうとして飯盛山から見たら城からは既に煙が上がっていた。「城もダメだ！主君も」最後か」と絶望して自ら若い命を絶つた。実際には敵の砲弾で少し火災が起きていた程度で、城は健在だったと言われる。双眼鏡でもあれば確認が出来たであろうけれども：気の毒な話である：名城では無くても「武將と城」とは一体のものであり、落城は城主の最後というのが決まりのようである。純粋な白虎隊の少年たちはその様に信じていたのである。ところが時代は少し遡つて、戦国時代の末期に近い頃、攻め込まれて本城が敵に占領されたのに自分分は親戚に疎開をしていた武將がいるらしい。

石岡の歴史を物語る府中城は欠片さえ残っていないが、広く知られているところによれば天正十八年(一五九〇)十二月二十一日に佐竹の軍勢に攻め込まれて落城し若き城主の大掾清幹は城内から通じる抜け穴を伝つて菩提寺のある平福寺まで辿り着き切腹をして果てたことになっている。これが鎌倉時代から石岡を拠点としていた大掾氏の最後であり、以後は佐竹氏が府中を支配した。佐竹の背後には豊臣秀吉が居たから文句も言えないが、暮れの忙しい時期にそれも予定表に載っていないか。つたのに佐竹が攻めて来たのは、敵側が仕事の効率化と経費節減を考えて、水戸城に居た江戸氏を滅ぼすツイデに来たからである。

敵側の都合はどうでも、これで大掾氏は消滅したのだが、それ以前にも府中城(大掾氏)が事実上は滅亡していたのではないかと疑われるような

記録がある。

織田信長が徳川家康の応援を得て近江国(琵琶湖北東部)で浅井・朝倉連合軍を敗つた姉川の合戦があった元龜元年(一五七〇)には大掾清幹の父親である貞国が、小田勢に追われて府中城を逃げ出し玉里の砦(とりで)に隠れていたらしい。白虎隊の少年たちと違って、この場合は主君が生きていて城が敵の手に渡つたのであるから家臣たちはどうして良いか迷つた。

それより四年前の永祿十一年には府中の領民と小川の領民とが境界のことか何かで争いを起こし双方に死傷者が出た。小川の領民が管轄をしていた佐竹の代官に知らせたので佐竹の軍勢が攻め寄せてきた。それが鬼と恐れられていた車丹波守であったから、府中に居た小田の代官が稲吉の砦まで逃げてしまった。それを知つた大掾氏はチャンスとばかり、織田氏の束縛を脱して佐竹氏を頼ることになったらしい。

これらの記録に見られるところでは大掾氏が小田・佐竹の間に在つて右往左往していた様子が窺える。府中城に落ち着いていられず危険を感じては逃げ、逃げては戻り、落城以前に既に自分の城に居られなかつたというのは大相撲ならば「死に体」である。天正十八年暮れの滅亡時には、ツイデとは言つても既に身近に敵が迫っているのに「：府中の君臣聞くより色を失う。如何にせば好からん。評定区々(まぢまぢ)にして容易にまとまらず：(常総戦紀)」とあるから大掾氏の統治機能は失われていたのである。

意味は違ふかも知れないが「終り良ければ全てよし」と言う諺もあり「有終の美を飾る」とも言うから、庶民と違って名族と言われる家は最後が

肝心なのであろう。白虎隊の少年たちのように城の煙だけ見て死に急ぐのも哀れであるが、何度も城を追われたり、敵を目前にして「如何にせば好からん…」などと慌てているような大名は戦国時代でなくても存続が難しいし、立派とは言えない。そうなる。「大掾氏は桓武平氏である…」などと無理をして簡単に言わないほうが親切なのであろうか…とも思えるのである。

失礼なことを言わして貰えば、石岡に居た大掾氏が平氏の末裔であることは否定しないが昔を誇る前に思い込みでは無く正しい歴史を伝え、遺跡を保存し、此の地を訪れてくれた人たちに納得して貰うことが出来るかどうか、栄光ある歴史の里の住民の責務であるような気がする。

## 【風の談話室】

### 《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

コンサートを楽しむ 小峯(相木) 久美子

陸平をヨイシヨする会では毎年「縄文の森コンサート」を開催しています。

「縄文の森コンサート」に出演して下さった方達はヨイシヨする会の活動に共鳴して下さいますので、今でも交流が続いている方もいます。ことば座との関わりも「縄文の森コンサート」から始まりましたね。

今年の「縄文の森コンサート」は14回目となり、1月22日にシャンソン歌手の西原良子さん(霞ヶ浦市在住)、ピアノ伴奏に山本光さんを迎え新春シャ

ンソンコンサートを開催しました。

歌手の西原良子さんはつくば市でシャンソン同好会の講師をされていてそのご縁で出演していただくことになりました。西原さんのコンサートは楽しいトークが特徴で、リラックスした雰囲気の中で歌を聴くことができるので、心が開かれ、歌が心に届くのかしらと感じました。

日常から非日常に身をおくとき、私の場合は観る側になった時雑事が頭をよぎるので西原さんの歌の世界へ引き込む力に感動しました。そして、楽屋で少しお話をさせていただいたのですが、伴奏のピアニストの山本光さんを伴奏ピアニストとして育てているのです。まだ新人の彼を育てて6年になるそうです。

その山本光さんは、昨年12月14日に美浦村文化財センターにピアノが寄贈された記念としてのクリスマスピアノコンサートにも出演してもらいました。感性が柔らかい子だなあというのがその時の印象でした。

今回で2度目の出演となりますが、仕込みから撤収までよく働く好青年です。まだ彼はギター文化館に行ったことがないので、「とても素敵な音の響きだよ」とギター文化館見学にお誘いしました。

私の4月8日のバレエ発表会にも出演をお願いしました。またひとつ素敵な出会いから素敵な舞台ができそうです。

### 沖縄の風に吹かれて

田島早苗

待ちに待った「沖縄スタディーツアー」の発表

日羽田空港までのバスは、氷点下の早朝四時から六カ所の待ち合わせ場所を乗り継いで出発という厳しきだったが、誰一人遅れることもなく「陸平をヨイシヨする会」と「女性活動を未来へ繋ぐ会・結」及び、その趣旨に賛同した人々を加えた総勢二十二名の熱気溢れる旅立ちになった。

時間に遅れないように、昨夜一睡も出来なかつた人も多く、早速居眠りを始めた人々の中で、沖縄初体験の私の胸は期待ではち切れそう、眠気までも何処かへ吹っ飛んでしまった。羽田八時発のJALでいよいよ那覇へ。

厳寒の東京を出発して三時間、信じられないほど暖かい那覇空港には、手配万端迎いのバスが待っていた。ツアー発案者増尾さんのピースポート仲間の女性と、元校長先生だった活動家の案内を頂き、早速スタディーツアーの開始。那覇の中心部には、私が漠然と描いていた沖縄のイメージ「穏やかな時間の流れる田園風景」は無く、高層建築のひしめく東京さながらのコンクリート・ジャングルだった。温暖な気候の沖縄では、野菜は冬の方が良くできるとか、サトウキビは一月から三月頃までが収穫期だという。異常気象のため今年のサトウキビは不作だそうだ。

那覇市では、住むところが少なくなり、住宅街は南城市にのびているという。南城市玉城村字糸数集落の北はずれ屋敷原には、地元で「アプチラガマ」と呼んでいる自然洞穴があり、戦時末期の昭和二十年二月頃から米軍の港川上陸に備え、球部隊の地下陣地として手を加え、ガマの中に歩道を造り、数百人の兵隊が収容できるように整備され、部落の共同製糖所を壊し、糸数部落の民家四、五軒を買って、ガマの中に大人がかがんで入れる

くらしいの低い二階建ての家が造られた。球部隊が糸数製糖所の発動機を動かして、電線を引き、ガマの中を明るくしていたが、その後発動機を入れて発電したという。

昭和二十年三月二十三日、米軍は港川沖から艦砲射撃を始め上陸するかのように見せかけながら、四月一日に中部の西海岸に上陸したため、糸数にいた美田連隊は中部戦線へ移動していった。

このガマは昭和二十年五月一日から南風原陸軍病院の分室に設定され、防衛隊が弾雨の中重症患者を担架で運び約四百名の患者が移動してきた。軍医が三名看護婦三名と衛生兵も居たが、ひめゆり学徒隊十六名がきて看護に当たったようになった。ガマを明るくしていた発動機は球部隊に撤収され、ランプやローソクの明かりで治療に当たるとはなかった。

やがて分室は、米軍が近くに進駐してきたので、五月二十五日に南部の伊原糸数分室壕（第一外科壕）へ撤退するが、目的地に着くまでばらばらに歩いていった。歩くことが出来ない重症患者数百名には毒薬が渡され、糧秣監視兵四名と共に残された。ガマの中には二百名あまりの住民が避難していたが、ガマの中で手榴弾自決した人はなく重症患者の飯炊きが居なくなつたので、住民達が軍の米を炊いてお握りを作つてあげたという。

黄色い安全帽をかぶり、懐中電灯を持つて真っ暗闇のガマに入った。手すりで作られ少しは歩きやすくしてあったが、湿つて滑りやすいでこぼこ道、頭をぶつける度に安全帽の有り難さを噛み締めながら進む隊道の長いこと。こんな不自由なところで傷病兵の看護に当たつていた少女達の思いが胸にしみこみ、破傷風患者・脳症患者・死体安

置所等の案内板を見る度に鼻の奥がつんと痛い。

最後に低い二階家が建てられていたという場所のあまりの狭さに驚きながらその場所で懐中電灯を消し暗闇の中で黙祷。尊い命を散らした英霊達の思いがひしひしと迫つてきて、涙を禁じ得なかつた。  
(続く)

### 《ことば座だより》

進化する朗読舞劇(2) 脚本・演出 白井啓治

朗読を能のような舞技に表現すると面白いだろうな、の発想を持ったのは三十年以上前のことであつたが、小林幸枝の手話に出会い「これは舞になる」と半ば死んでいた発想に奇跡的と言える芽が出てきたのであつた。それで小林を強制的に俳優修業に引きずり込み、「朗読舞」という朗読を手話の舞いで表現する舞台作りを始めたのであつた。それから五年が過ぎて、ようやく朗読と手話の舞いによる舞台の第一段階が完成してきたのであつたが、そこに思わぬ発展の切っ掛けをもらうことになつた。

もうこれは何回か書いているのであるが、美浦村の市民劇団「宙の会」を主宰しておられる市川紀行氏との出会いの因が生まれ、それが転がって現代舞踏の柏木由紀子さんとの縁が生まれた。

映画や舞台の世界と言うのは実に狭い業界で、柏木さんとの交流が生まれた途端、本人同士はまったく接点はなかつたのであつたが、小生にとつても柏木さんにとつてもごくごく近い人との接点のあつたことが知れたのであつた。

市川さんの取持ちによつて一緒に舞台を創ることになり、手話舞を基軸とした朗読舞がモダンダンスと言う現代舞踏を取り込んで、すべてにおける垣根を取り払つての舞台表現を生み出すこととなつた。この新しい舞台表現の接着剤になつてくれたのがオカリナ奏者の野口喜広さん矢野恵子さんの存在であつた。

この創作・表現意欲が新しい展開を呼び、今年の八月二十日〜二十四日の予定で、香港はマカオで「日本文化芸術の祭典」と題した公演が実現されることになつた。日本からも祭典への参加ツアーが企画されており、来月号にはその詳しいことがお知らせできるだろうと思う。

今回のマカオの舞台では実現は難しいが、ホルストの日本組曲をこの常世の国をモチーフとした舞物語と合体し、新しい編曲で「平成の歴史舞踏劇(新説日本組曲)」として中央の舞台に上げてみたいと考えている。これが実現できれば、手話舞としてスタートした舞台表現が、範囲を限定しない、大きな広がりを見せた新しい形の舞踏劇として、そのスタイルを確立することが出来るのではないだろうかと思つている。

希望とは、自力によつて既成を打ち破り築き上げる現実としての夢であると小生は考えている。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>